

2022年度 第2回教育課程編成委員会 議事録

日時：令和5年2月20日（月） 15時30分～16時30分

場所：5階 カンファレンスルーム

出席者：委員

- A 看護学科実習病院 副院長兼看護部長
- B 山口県介護福祉士会 会長
- C 介護福祉学科実習施設 施設長
- D 介護福祉学科 卒業生
- E 看護学科 卒業生

欠席者：山口県看護協会 会長

出席者：学内

- F 校長
- G 副校長 議長
- H 副校長
- I 事務長 司会
- J 看護学科 学科長
- K 看護学科 実習調整主任
- 書記 介護福祉学科 教員

欠席者：介護福祉学科 学科長

1. 校長挨拶

皆さん、第二回の教育課程編成委員会にご参加いただきましてありがとうございます。コロナ禍ということで色々な影響がありました。このコロナをきっかけにICT化を効率的に進めていくことができるのではないかと考えています。もちろん良い看護師あるいは介護福祉士を育成しようと思うと知識・技能・心の3つをきちんと育てなければいけません。国家試験に合格するために一番大切なのは、知識です。今年度、国家試験に関しては少し力を入れましたが、すぐに成果が上がるというものではありません。しかし、学生も先生方も一生懸命やってくれましていくつかの手応えを感じています。ICT化に関しては、看護学科一年生は今年から電子テキストになりました。年度途中でアンケートをとり、来年度につなげていきます。介護福祉学科では、特に留学生に対しての国家試験対策でムードルという大学でも使用している教育システムを取り入れ、学生はスマホで取り組んでいます。今後は、日本人の学生も取り組むことができる仕組みを考えていければと思います。そのようなことも含めてご意見いただければと思います。よろしくお願いします。

2. 議事

(1) 令和4年度教育課程に基づく取り組みと評価

(2) 令和5年度教育計画

<看護学科>

J：資料Ⅰに沿って説明。

<介護福祉学科>

H：資料Ⅱに沿って説明。

A 委員：学生たちを受け入れて下さっている実習施設の方々が新卒学生を受け入れて、例年と比べてどのように感じているのか、コロナの影響を受けても例年の学生と比べてどうなのか。

K：実際の患者さんは順調にはいかず、いろいろなことがあり、患者さんの反応も違うので想定外のこともたくさんある。短い間でも臨地実習は刺激になって学びを吸収している。日にちは少なくとも機会があれば、臨地実習は必要なものだと感じている。実際にわかるということと実際に見てきたというのは、違うのではと感じている。

G：送り出す側の学生の変化をどのように感じているか。

K：最初の3日間だけ実習させてもらい、その後、学内実習を行った。短期間でも実習をさせていただくと、実際の症状や患者さんの反応からさまざまなことを学べる。最初から学内実習であっても途中で患者さんの状態を変えてみたり、状態を悪化させたりしたり、転倒、不穏状態にしてみたりと、いろいろなパターンを考えながら実習を考

えている。患者役は教員ですることもあるが、学生同士で患者役をすることもある。学生同士で患者役をして援助すると緊張感は少し欠けるが患者の気持ちが体験できる。3年生になるとより実際の患者になりきって援助ができるようになる。ただ実際の患者さんからの反応ないので、観察技術やコミュニケーション技術に関しては、全て臨床実習を行った場合と比べると、成果が低いと思う。その分しっかり学内で思考を整理することに力を入れている。それが実際に就職した時に繋がっていけばと思う。

- C 委員：介護の方は、当施設ではクラスターが2回でているものの、実習の受け入れをすることができてよかった。訪問介護に関しては、感染対策の観点からハードルが高い。施設内の行事は違うものに変更した。職員の体調が悪いときは出勤を控えるなど対策をとった。
- D 委員：施設として教育機関との関係性は継続していきたいので極力受け入れている。実習を受け入れるメリットは職員にとっても大きい。コロナ禍であってもできるだけ協力していく姿勢は変わらない。コロナ感染した職員のケアも必要で、学生さんがもし仮にそういうふうになってしまうと、プレッシャーを感じると思う。学校とも共同して動いていければと思う。
- G：学内でも感染対策を徹底しているが、意識が低いのか行動が伴わない学生もいる。来年には社会人になって働くというところでは厳しい。標準感染予防対策として行動してほしいところである。
- E 委員：今年度はもうコロナの疑いの受け入れなどにより例年以上忙しい状況だった。新入職員は退職した方に聞くと、ギャップがすごかったと言われていて、入職してからのギャップを埋めていかなければならないと思っている。学生のときに多重課題として2人受け持つが、実際は2名以上に関わらなければならないので、その意識をもう少し持ってもらいたい。自分が伝播させないための清潔、不潔の区別ができるように学生のころから指導をお願いしたい。
- G：学校の玄関の入り口にあるアルコールの消毒でさえ素通りしている現状があり、大変苦勞している。担当教員が入り口で検温表を確認し、入力していない学生をチェックし、指導していた。実習1週間前は徹底して行っている。持ち込まない、広めないというところをわかるまで伝えていく必要がある。介護実践力そして看護実践力向上を目指し、しっかり考え、判断して行動するというところが重点的な新カリキュラムの特徴になっている。
- J：複合的な課題にどう対応できるか、卒業前の演習の中でも力を入れており、優先順位を考えてメンバーシップを取り、突然の出来事にどう対応できるかみたいなのところを大切にしていきたい。
- B 委員：実習を受け入れたことがなく、イメージがわきにくい。学内実習に関してどのように行っているのか、特に訪問介護は外国人にとってはイメージしづらいところがあるが、工夫されているところをお尋ねしたい。
- L：できるだけ家庭内の雰囲気のあるものを環境の中に取り入れていくように工夫した。段差は階段のようなものを作り、その人らしさを考えるということでは、何が好きなのか、日頃何をして過ごしているのか、身近な話題から会話を引き出す。女性として身だしなみをきちんとしたいという思いがあれば、利用者の口紅、化粧道具、くしとか身近にあるようなものを実際に持ってきて配置した。その他に、好きなものや趣味がわかるようなものを配置し、関わりの中でそういったことをいかに引き出せるかということを考えてもらうことを大切にしたい。きっかけづくりができるように少し環境を工夫した。
- B 委員：在宅と施設の違いをどのように伝えているか。
- L：実際に訪問介護をされている現場の方に来ていただいて実際の様子を学生に伝えていただいた。
- B 委員：訪問介護にも興味をもって関われる人材の育成をお願いしたい。
- F：先ほどの清潔不潔の区別に関して学生の切実感がないので、学校での指導は難しい。今回、申し訳ないが実習先でしっかり指導していただきたい。学校では、食事の時に富岳でとった動画で飛沫がどれくらい飛ぶのかという動画を流したり、学校側は手を変え品を変え、色々と工夫しながら指導してきました。3年になると学生自身もかなり充実してきている。リアリティということで現場の意見も聞きながら指導していきたい。

議題（1）、（2）について、全員一致で承認した。

I：委員の方々は、今年度で2年間の任期が満了となる。次回の会議は、10月開催を予定している。